

英語授業におけるteam teachingの可能性

—ネイティブスピーカーの役割についての研究—

Possibility of team teaching at junior college

—A study on the role of a native teacher in an English language classroom—

池頭 純子

大妻女子大学短期大学部家政科

Atsuko Ikegashira

Department of Domestic Science, Otsuma Women's University Junior College Division

12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, 102-8357 Japan

キーワード：英語授業，ティーム・ティーチング，ネイティブスピーカー

Key words : English class, Team teaching, Native speaker

抄録

大学での英語教育は基本的には日本人教員あるいはネイティブスピーカー教員のいずれか1名で行われる。本研究では、大学の英語クラスにおいて日本語教員とネイティブスピーカーがティーム・ティーチングを行う可能性について検討した。英語が苦手な学生が多いクラスにおいて、授業のほとんどを英語で行い、学生が英語を聞くという環境に慣れ、多くの日常表現を体験することにより、自らも英語で発信する力を養うためである。ネイティブスピーカーは単なるゲストではなく、主体的に学生とかかわり、自らの体験を含め英語社会の文化や生活についても幅広く学生に伝えることで、それまで海外に興味のなかった学生も含め学生たちの視野を広げることに大きく貢献した。

1. はじめに

本論文は2020年度戦略的個人研究費のうち学長要望課題「大学教育の質的向上に関する研究」として採択された掲題の研究報告である。

2014年の文部科学省の「英語教育のあり方に関する有識者会議からの提言」^[1]にあるように、特に小学校ではALT (Assistant Language Teacher) とのティーム・ティーチング (Team Teaching) を活用することが求められている。しかし同時に上掲の提言には小学校でのALT とのティーム・ティーチングについての様々な課題が挙げられている。ALT と学級担任の連携、ALT と担当教員の役割の明確化、研修制度、財政負担、地域格差などが挙げられ、ティーム・ティーチングの実施はなかなか思うように進んでいないことがうかがえる。文部科学省の上掲の提言の中で述べられているティーム・ティーチングによる習得目標は以下の2点である。

1. 標準的な英語音声に接し、正確な発音を習得する
2. 間違いを恐れずに、英語で情報や自分の考えを述べるとともに、相手の発話を聞いて理解するための機会が日常的に確保されること

ネイティブスピーカーが授業に参加することにより、生きた英語に触れ、英語学習への動機付けとなり、異文化理解を促進すると考えられている。

こうしたティーム・ティーチングは小学校を中心として実施され、多くの生徒が体験している。しかしながら、中・高においては受験を前提として授業が行われるため、ネイティブスピーカーによる授業は会話のクラスなどに限定され、学校間格差が大きい。

中・高においては英語を専科教員が担当するため、専科教員が授業を英語で実施することが求められている。すでに様々な取り組みがなされているが、こちらもなかなか難しい問題を多く抱え

ている。大学での英語教育に関してはまだまだ英語での実施は多くはないと考えられる。また大学での授業は科目にかかわらず英語で実施することを求められるようになってきている。

大妻女子大学では2019年にOxford EMI (English as a Medium of Instruction) プログラムを千代田キャンパスコンソーシアムの事業として近隣の4大学とともに主催し、大学におけるさまざまな科目を英語で行う際の教授法について実践を通して学ぶ講座を開催した。筆者も参加し、OxfordのJulie Dearden氏、Tom Spain氏の指導の下、他大学や大妻女子大学の様々なジャンルの教員と英語で授業を実施する際の困難さや英語で授業をする重要性について話し合った。この講座は筆者がネイティブスピーカーとのチーム・ティーチングを実施する前で、筆者が単独で授業を行っており、学ぶところが多かった。

大学の英語の授業を英語で行なう場合、日本人教員が行なう場合と、英語ネイティブスピーカーが行なう場合が考えられる。英語を専門とする学生の場合は別であろうが、短期大学部家政科生活総合ビジネス専攻（以下本専攻）のように、英語が苦手あるいは嫌いという学生が多い場合、日本人である教員がすべて英語で授業を行なおうとしても、教員の言っていることがよくわからないため、日本語で説明する必要が出てくる。学生は日本人教員であれば、わからなければ日本語で聞けばよいと考え、緊張感が薄れる。一方、英語ネイティブスピーカーが単独で授業を担当する場合、学生はわからなくてもそのままにしまったり、授業への興味を失ったりする危険性がある。学生の興味を引こうとする場合、ゲームのようなものを多用し、一過性の興味に終わり、自ら発信する力を養うことにつなげることが難しい場合も多い。

本専攻では、多くの卒業生が、在籍中に勉強しておけばよかったこととして英語をあげている。卒業生の中には卒業してすぐ大企業の役員秘書になる者や、海外との取引のある部門の担当になる者、外国人と直接電話でやりとりする部署に配属される者などがある。そうした卒業生の声を受けて筆者は何度か英語での授業を試みたが、学生が受け入れようとしないこともあり、なかなかうまくいかなかった。2018年からは「ビジネスベーシック英会話I」を1年生の必修科目とし、原則可能な限りすべてを英語で行った。しかしこのときは

クラス単位で授業を行い、1クラスが40名以上で、英語のレベルもかなり差があり、全員が満足するような内容の授業を行うことは難しかった。

そこで学生がどうしても英語で理解し英語でコミュニケーションを図らなければならない場を設定する必要があると考え、2019年度から英語ネイティブスピーカーを筆者の授業にゲストとして招き、15回の授業のうち試験以外の14回に参加してもらい緊張感のあるチーム・ティーチングによる英語の授業を始めた。

ネイティブスピーカーとの共同授業2年目にあたる2020年度は2019年度の経験を元にネイティブスピーカーがより有効に授業に携われるようにするためにどのような対応が必要かについて研究した。しかしながら、2020年度はコロナウイルス蔓延のため、オンラインとなった。対面で出来る内容と、オンラインで行なう内容とでは大筋では変わらないものの、教育効果、また共同作業に関しては十分満足のいくものとはならなかったことはあらかじめ断っておかねばならない。

2. ネイティブスピーカーの役割

チーム・ティーチングにおける母語話者教員の役割、英語ネイティブスピーカーの役割についてはこの30年ほどにわたり様々な研究がなされてきている。以下はそのいくつかをまとめたものである。

2.1. 小・中・高校におけるチーム・ティーチングとネイティブスピーカーの役割

多くの大学生は小学校、中学校、高等学校のすべてあるいはいずれかの段階でネイティブスピーカーの授業を経験している。筆者は前任校で複数回、港区内の小学校のチーム・ティーチングを見学する機会を得たが、年齢が低いこともあり、主に歌やゲームといった身体活動を伴う内容であった。ネイティブスピーカーはクラス担任と事前に打ち合わせをして授業にあたっていたが、担任の先生に確認すると、事前の打ち合わせは十分とはいえないとのことだった。港区は全国平均から見ると生徒自体が多国籍であったり、低学年からの英語クラスの導入が進んでいたり恵まれた環境ではあったが、いずれの学校も授業準備などに追われ、英語の授業の準備として、派遣で訪れているネイティブスピーカーとの打ち合わせに費や

すことの出来る時間は多くはなかった。

ネイティブスピーカーに触れる機会があることは英語という言語・文化を学ぶ上で必要なことではあるが、多くの現場で行なわれているようなネイティブスピーカーとの授業ではせっかくのネイティブスピーカーを十分に活用できていないと言わざるを得ないと思われる。

Collins (2012: 79)^[2]はこうした状況を踏まえ、日本人教員 (JET) と英語ネイティブスピーカー (ALT) の授業内での役割について、相互の協力が重要であると述べ、さらにネイティブスピーカーについては教室以外のコミュニティーとのファシリテーターとしての役割が重要であると述べている。日本人教員が背景として持っている言語環境のもとで行なわれる授業の中に、ネイティブスピーカーが日本以外の文化的要素を持ち込み、可能であればさらに学校以外のところと生徒 (学生) を結びつけより現実的な英語を使用する場面を設定していくことが大きな役割となるということである。

2.2. 大学におけるティーム・ティーチングの試み

Gladman (2018)^[3]は宮崎国際大学 (以下 MIC) でのティーム・ティーチングの実践に基づき、日本人教員と英語ネイティブスピーカーの役割について考察している。

MIC では、専門科目 (英語以外の科目) を担当する日本人教員と、英語ネイティブスピーカーがペアで授業を担当している。MIC での教授法はいくつかの先行研究に基づいて“collaborative interdisciplinary team teaching” (CITT, 学際的協同ティーム・ティーチング) と名付けられ、content teacher (CT, 科目担当教員) と language teacher (LT, 言語担当教員) が対等の立場で授業運営、教材作成、成績評価、授業評価を行なっている。対象となるのはほぼすべての 1, 2 年生のようである。

この取り組みにおいて、Gladman (2018: 51) は、CT と LT が相互に共同関係を築き、お互いの役割と権限を尊重することが必要であり、そうした関係の上に成り立った CT と LT による授業は、講義内容の多様な視点を学生に示すよい見本となる、と言っている。

授業内でその分野の専門家ではない英語ネイティブスピーカーが述べる内容と、それに対する専

門家の意見の交換は、学生にとって見解の違い、視点の違いを示すとともに、異なる意見を述べてもよいという意識を持たせ、相互に異なる意見を述べ合うことの重要性に気づかせるよい機会となると言っている。1 人の教員が授業を担当する場合、いくつかの見解や解釈を紹介することはあるが、主に担当者の研究によった内容になることは否めない。そこへその分野の専門家ではない、立場としては学生に近いネイティブスピーカーが加わり、科目担当の教員と意見を交わすことは、学生にとって良いロールモデルとなると思われる。言葉の壁は多少高くなるが、より精神的な自由度の高い授業を展開することも可能になると考えられる。

2.3. 英語クラスにおける L1 スピーカー (日本語母語教員) の役割

前述したように、一般的には日本人あるいは英語ネイティブスピーカーのいずれかが大学での英語授業を担当することが多く、それぞれに長所、短所がある。費用の点からすると英語の授業であれば英語ネイティブスピーカーの教員が担当することが望ましいと考えられるが、ネイティブスピーカーのみの授業には取り扱える内容に制限が生まれることが多く、大学生として求められる英語力の養成には必ずしもつながらない。

McNeill (2017: 239)^[4]はここ 20 年あまりの教員の言語認識 (teacher language awareness (TLA)) 研究の視点から英単語の学習困難さについての分析を行い、学生の L1 を理解している教員 (日本語母語教員) は、学生が読解で感じる困難さについてより理解が出来ると述べている。英語ネイティブスピーカーのみの授業では学生が困難を感じる点を十分に理解しないまま授業が行われ、学生は不消化のまま終わることが多く、満足感につながらないことも多い。ティーム・ティーチングで授業の主体を英語ネイティブスピーカーに担ってもらう一方、学生が疑問に思う点、わかりにくい点、文化的な要素についての疑問点などを日本人教員がネイティブスピーカーに学生に変わって投げかけることにより、学生は間接的に内容を理解することが出来る。逆に、学生がうまく伝えられない内容について察し、補助的な発言をしたりすることで、学生に発言する意欲を持たせることにつながるといえる。

英語の授業であれば英語ネイティブスピーカーの教員だけで十分だというのは、よほどそのネイティブスピーカーが日本語や日本人の英語経験について十分理解し、経験がある場合に限られる。多くのネイティブスピーカーは若く経験が浅いため、なかなか学生が困難に感じる点について理解できない。ネイティブスピーカーが単独で行っている授業について学生からの不満が聞かれるのは上記のような点に関してであり、費用の点で可能であれば、英語ネイティブスピーカーと日本人教員とが共同で授業を行うことが望ましいといえる。

3. 短ビジでの取り組み

本専攻内での英語科目の変遷については池頭(2020)^[5]に詳述しており、本稿では省略するが2020年度は本専攻で英語による授業を実施して3年目となる。すべての学生は1年生の前期に必修の「ビジネスベーシック英会話Ⅰ」を履修する。ネイティブスピーカーとの授業「ビジネスベーシック英会話Ⅲ」を履修するのは、基本的には入学時に行なうCASECの成績に基づいて教員側から受講を勧めた学生である。もちろんCASECの成績にかかわらず、本人が希望すれば履修している。

必修の「ビジネスベーシック英会話Ⅰ」は、2020年からは1年生全員をCASECの成績に基づき4つのグループを分けて授業を行ない、教員は日本人教員(筆者)のみで担当する。多くの学生は高校時代までに英語での授業を体験してはいるものの、積極的に話す、あるいは聞き取るということに関してはほとんど経験がないといつてよい。また中学時代、あるいは高校の初期から英語が嫌いという学生が9割に上り、最初1, 2回の授業は英語だけで話されるという環境に慣れることで精一杯であるが、自己紹介など自ら発言する機会を設け、英語を聞くのも教員だけでなく同級生の英語を聞くという体験を通して、次第に英語のみの環境に対する恐怖感や嫌悪感はなくなるようである。学生アンケートでも以下のような感想が聞かれる。

- ・授業中は英語のみという制限があるので、なるべく自分の知っている単語で伝えようとして英会話力が身につくそうです。わからない時や間違っている時はすぐ訂正してくださるので安心できます。
- ・英語を理解するのは難しいですが、楽しい

です。

多くの学生は中学・高校を通して長文読解、文法問題といった日常会話からは距離のあるものを英語として学び、逆に日常的に必要なとされる表現や単語を学んでいない。日常生活の中で耳にした目にしたことのある単語であっても、それらを使うことが出来ない状況にある。教員は平易な表現、短い表現を使うことを心掛け、ことさら難しいことばを使わずとも日常会話が成り立つことを示す。最初はわからなくても、繰り返し英語を聞くという体験をすることで、少しずつ聞き取れるようになり、中学で学んだ表現で自分の言いたいことを表現できることを体験することにより、英語を学びたいという意欲が醸成されるようである。

このような準備段階を経て、後期にネイティブスピーカーと日本人教員によるティーム・ティーチングの授業を受けることとなる。ネイティブスピーカーと話す機会はなるべく多い方がよいと思われ、2019年度には、前期にUCL (University College London)からのインターンシップ生2名を必修の「ビジネスベーシック英会話Ⅰ」の授業に招き、1年生全員がネイティブスピーカーと会話する機会を持った。UCLの学生は本専攻の学生たちと同年代で、興味や関心が近く、話したいという欲求が学生の中に見られ、改めて英語ネイティブスピーカーの重要性を感じた。UCLの学生は各クラス4回の授業に参加し、学生がプレゼンし、そのプレゼンに対してUCLの学生からコメントをもらう形で会話をした。学生は緊張しながらも、必死に自分の思うことを英語にしようと努力し、4回目にはかなり積極的に話しかけることができるようになっていた。

2020年度は、コロナウイルスの蔓延で外国からの学生の受け入れが中止されこのような機会は持てなかったが、今後再開されることを期待したい。UCLの学生はインターンシップ生として来ており、外国人に対して英語指導をした経験を問われている。2019年度に大妻に来た2名は英語指導の経験が豊富で、熱心に学生の指導にあたってくれた。長期にわたって継続的な指導は期待できないが、こうした形でのネイティブスピーカーとのティーム・ティーチングも一定の効果は望めると考える。

4. 2020 年度ネイティブスピーカーとのチーム・ティーチング

4.1. 授業運営

2020 年度は、コロナウイルス蔓延の影響で、後期のネイティブスピーカーとの授業もすべてオンラインとなった。オンラインでの授業は前期で体験済みではあったが、やはり対面での授業を望む声は多かった。

2019 年度に初めてネイティブスピーカーを外部講師として招き授業を行ない、その際こちらからどのような内容を盛り込むのかについて要求を出し、話し合いを重ねてプログラムを作成した。招へいたネイティブスピーカーは在日 20 年以上で、民間の英会話学校での教歴が長いが、大学のクラスでの会話授業が初めてということもあり、2019 年度は筆者が主導し、ネイティブスピーカーがサポート役を担う形で授業を進めた。2020 年度は 2019 年度のカリキュラムを元に、以下のようなレッスンプランを作成し、それに基づいて授業を行なった。

Lesson 1	Self-introduction
Lesson 2	My daily life: What do you usually do?
Lesson 3	Occupation: Coolest jobs in 2019
Lesson 4	Review
Lesson 5	Writing an Email
Lesson 6	Replying to Emails
Lesson 7	Making Speech: Speech Structure: Hook, Supporting Evidence, Powerful conclusion
Lesson 8	Speech: Expressing an opinion with reason
Lesson 9	Speech: Pronunciation
Lesson 10	Presentation (1)
Lesson 11	Presentation (2)
Lesson 12	Working Women overseas and in Japan
Lesson 13	Role Model
Lesson 14	My Dream

ビジネス専攻ということで、一般的な話題のほかに、ビジネスで必要となる email の書き方や、海外と日本の働く女性、ロールモデルについても学生とともに考える時間を設けた。また 2018 年度

から学内のスピーチコンテストに参加する学生がおり、なるべく多くの学生にスピーチの体験をさせたいと考え、スピーチの作成、プレゼンテーションの時間も設けている。2020 年度は受講生のうち 2 名がスピーチコンテストに参加し、銀賞と銅賞に入賞した。

2020 年度は 2019 年度の経験を踏まえ、ネイティブスピーカーが主導する形で、筆者がサポートを行なった。授業の進行、学生とのやりとりは基本的にネイティブスピーカーが行い、学生がうまく表現できずに困っているとき、あるいは補助的な情報が必要と思われるときに筆者が発言するとどめた。

毎回課題提出を求めたが、課題の提出および返却については筆者が manaba を利用し、学生とネイティブスピーカーを仲介して行なった。2019 年度も毎回のレポートや提出物については、ネイティブスピーカーがチェックを行ない、フィードバックする形で進めたが、2020 年度はオンラインであったため、フィードバックについてはよりスムーズに行えたと考えている。ネイティブスピーカーが即座に学生の課題のチェックをし、フィードバック出来ることは、学生にとっては励みになり、大きな効果を持っていたと考えられる。また単に各人の間違いのチェックをするにとどまらず、共通の間違いなどについても適切な指導があり、多くのことを学び、学習意欲の醸成に役立ったと思われる。

またオンラインで行なったため、直接話すことができず、学生は少し残念に感じていたようだが、ネイティブスピーカーは 2 台の PC を駆使して、Zoom によるリアルなオンライン授業を行ないながら資料の提示や気づいた点の書き込みについて自由に行なうことが出来、むしろ対面よりも資料の提示についてはうまくいったと感想を述べていた。

学生は基本的に画面を通してネイティブスピーカーとの 1 対 1 の会話になったが、話していない学生もオンラインの画面で会話を聞くことで、対面よりもむしろ緊張感を持って参加できたようである。ネイティブスピーカー自身の就業体験談もあり、日本では出来ないような経験についても学び、仕事について、会社についての海外の考え方やマナーについても知ることにより、学生は自らの進路についても考えるきっかけとなった。ネイ

ティブスピーカーは単に英語について指導するだけでなく、広く考え方や社会についても学生に示すことにより、学生の視野を広げることに大いに寄与したと考えている。

4.2. 学生アンケート

授業終了に当たってアンケートを行った。アンケートの書式は別紙の通りである。質問 1-5 の回答をまとめると表 1 の通りである。

表 1. アンケート集計 (人)

	評価 5	評価 4	評価 3	評価 2	評価 1
質問 1	8	3	0	0	0
質問 2	3	7	1	0	0
質問 3	3	6	2	0	0
質問 4	8	2	1	0	0
質問 5	10	1	0	0	0

質問 1 の「授業の満足度」については 11 名の受講者のうち 8 名 (73%) が 5 段階評価のうち最も高い 5 と評価し、3 名 (27%) が 4 と評価している。

質問 2 の「授業を理解できたか」という質問に対しては、3 名 (27%) が 5、7 名 (64%) が 4、1 名が 3 と評価し、おおむね授業内容を理解できたと考えられる。

質問 3 の「以前よりも英語に自信が持てるようになったか」という問いに対しては、3 名 (27%) が 5、6 名 (55%) が 4、2 名 (18%) が 3 と評価している。毎回英語のみの環境で質疑応答などの経験を重ねることで、少しずつ自信を持てるようになったことがうかがえる。

質問 4 の「授業が期待通りだったか」については 8 名 (73%) が期待通りだったとして 5 の評価をし、2 名 (18%) が 4、1 名 (9%) が 3 と評価している。おおむね学生が期待していた通りの授業を行うことができたと考えている。

質問 5 の「さらに英語を勉強したいと思うか」については、10 名 (91%) が 5 で、さらに意欲的に英語を学びたいと考えている。ほかの 1 名も 4 と回答し、全員が英語学習の意欲を強くしたこと

がうかがわれる。

質問 6 では毎回の授業の中でどのトピックが最も興味があったかをきいたものであるが、表 2 のような結果になった。

表 2. どの授業内容が一番興味があったか (人)

Lesson 2	1
Lesson 3	2
Lesson 4	1
Lesson 5	4
Lesson 6	4
Lesson 7	1
Lesson 8	1
Lesson 9	2
Lesson 10	4
Lesson 11	3
Lesson 12	3
Lesson 13	4
Lesson 14	4

複数回答を可としたため、ほとんどの学生が複数のトピックに興味があったと言っているが、中でも Lesson 5 の email を書く、Lesson 6 の email の返信を書く、Lesson 13 の Role Model、Lesson 14 の My Dream に興味があったという学生がそれぞれ 4 名いた。同じく 4 名が興味を持ったとした Lesson 10 はスピーチのプレゼンテーションで、Lesson 11 は後半のプレゼンテーションで 3 名が興味を持ったとしている。スピーチは各自が興味を持っていることについてまとめたもので多様な内容になっていた。友人がどのようなことを考えているのか、どのようなことに興味を持っているのかについて関心を持っていたことがうかがわれる。興味を持ったトピックを見ても、教員側が意図したビジネス専攻として必要な英語表現の習得に結びつく内容であったと言えよう。

質問 7 として自由記述授業の感想を聞いた。特に指定しなかったが、日本語で答えた学生は 1 名だけで、その他の学生はしっかり自分の意見を英語でまとめていた。以下はその一部である。

- This class was a lot of fun.
- I enjoyed the class
- It was fun because the teacher was very kind. I think I can listen to English better than before.
- I learned a lot from practicing intonation in the speech class. I will continue to do my best to improve my English.
- At first, I thought it was difficult for me to speak only in English, but as I took this lesson, I became to enjoy speaking in English.
- I would like to speak English actively in the future.
- I thought it's too difficult for me at first, but when I got used to listening to English, I was able to enjoy the class.
- 英語を交えながら、外国の文化や風習についても学ぶことができた

いずれの学生も最初は不安であったものの、次第に慣れて、最終的にはさらに英語力を高めたいという意欲に結びつけている。

5. まとめ

大学におけるティーム・ティーチングという形は一般的とは言えないが、英語に関しては有効な授業形態であるといえる。宮崎国際大学のような積極的な取り組みが英語以外の授業でも行なわれることが理想であろうが、実際にはまず英語に慣れることが肝要となる。中学・高校で英語が苦手な意識を持っていたとしても、大学で日常的に英語を使用することで学生は英語を学ぶ意欲を持つことがわかる。

真に学生が英語を学びたいと思うきっかけは、実際にネイティブスピーカーと会話する機会を多く持つことが最も有力なものとなる。ただ、ネイティブスピーカーであれば誰でもよいと言うのではなく、プログラムについてはそれぞれの専門

を担当する日本人教員が学生の状況を把握し、その専門分野にあった内容について考えてプログラムを構成することが肝要で、その意味でも日本語話者教員とネイティブスピーカーがティーム・ティーチングを行なうことは学生にとってよい環境となることが明らかになった。

謝辞

今回の研究は、人間生活文化研究所の戦略的個人研究費（S20101）によるものです。感謝申し上げます。また外部講師 Manson Lee 氏にも感謝申し上げます。

引用文献

[1]文部科学省. “今後の英語教育の改善・充実方策について報告～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言”. 初等中等教育局国際教育課外国語教育推進室.

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/102/houkoku/attach/1352464.htm, (参照 2021-3-21)

[2]Collins, P. “Revisiting assumptions about Team teaching”. *Educational Development*, 5 p.59-84.

[3]Gladman, Andrew. “Collaborative interdisciplinary team teaching – A model for good practice”. Andrea Honigsfield et al. eds., *Coteaching and Other collaborative Practices in the EFL/ESL classroom: Rationale, research, reflections, and recommendations*, 2012, p.49-58.

[4]McNeill, Arthur. “Native and non-native teachers’ sensitivity to language learning difficulties from a learner’s perspective: Implications and challenges for teacher education”. Agudo, Juan de Dios Martínez ed., *Native and Non-native Teachers in English Language Classroom: Professional Challenges and Teacher Education*, Walter de Gruyter Inc., 2017, p.239-253

[5]池頭純子. “英会話クラスにおける UCL インターン生の役割に関する一考察”. 大妻女子大学英語教育研究所紀要. 2020, p.1-23.

Abstract

The present writer teaches an English class with a native speaker of English. Team teaching is common in elementary schools in Japan. It is, however, not common to have native and non-native teachers in an English class in universities or in junior colleges. It has been made clear that to have a native speaker of English as a teachers in an English class encourage students to listen and speak English more and to have more interest in western society and culture. Non-native speaker teacher has its role as a facilitator to help students properly communicate with a native speaker of English.

添付資料

Review

1.2 Class _____ No. _____ Name _____

- | | | Yes | | |
|---|---|-----|---|-------|
| No | | | | |
| 1. How would you rate the class? | 5 | 4 | 3 | 2 - 1 |
| 2. Could you understand the class contents? | 5 | 4 | 3 | 2 - 1 |
| 3. Do you feel more confident speaking English than before? | 5 | 4 | 3 | 2 - 1 |
| 4. Did this class meet your expectations? | 5 | 4 | 3 | 2 - 1 |
| 5. Did this class make you want to study English more? | 5 | 4 | 3 | 2 - 1 |
| 6. Which topic were interesting? Write the number: | | | | |
| Lesson 1 | Self-introduction | | | |
| Lesson 2 | My daily life: What do you usually do? | | | |
| Lesson 3 | Occupation: Coolest jobs in2019 | | | |
| Lesson 4 | Review | | | |
| Lesson 5 | Writing an Email | | | |
| Lesson 6 | Replying to Emails | | | |
| Lesson 7 | Making Speech: Speech Structure: Hook, Supporting Evidence, Powerful conclusion | | | |
| Lesson 8 | Speech: Expressing an opinion with reason | | | |
| Lesson 9 | Speech: Pronunciation | | | |
| Lesson 10 | Presentation(1) | | | |
| Lesson 11 | Presentation(2) | | | |
| Lesson 12 | Working Women overseas and in Japan | | | |
| Lesson 13 | Role Model | | | |
| Lesson 14 | My Dream | | | |

7. Feedback about the course: (teacher, course, course content, homework, etc.)

(受付日: 2021年7月21日, 受理日: 2021年8月6日)

池頭 純子 (いけがしら あつこ)

現職: 大妻女子大学短期大学部家政科生活総合ビジネス専攻 教授

津田塾大学大学院博士課程満期退学.

専門は英語音韻史. 現在は英語の効果的な教授法について研究している.

主な著書: 生成言語研究の現在 (共著, ひつじ書房), 言語の事実を見つめて (共著, 開拓社)